

## ヲ格移動動詞のテイク/テクル形と二格、カラ格との格結合頻度について —本動詞の格結合頻度との比較を通して—

趙<sup>チョウ</sup> 金昌<sup>キンショウ</sup> (筑波大学大学院生)

### 1. はじめに

本発表はヲ格移動動詞の「テイク/テクル」形と二格、カラ格との結合頻度を本動詞の格結合頻度との比較に基づいて明らかにするものである。拙稿(2021a)ではヲ格移動動詞と二格、へ格、マデ格との結合頻度に基づいてヲ格移動動詞を4種類に分け、さらに拙稿(2021b)ではヲ格移動動詞の「V テイク/テクル」形および「V テイル」形と二格、へ格、マデ格との結合頻度を調査し、本動詞の格結合頻度との比較を行うことにより、「V テイク/テクル」の格結合変化に関わる要因について考察してきた。そこで本発表では、①ヲ格移動動詞の「V テイク/テクル」形と二格、カラ格との結合頻度の実態を散布図で示し、二格、へ格の結合頻度に基づいた動詞分類との比較を通し、起点という要素を付け加えると動詞分類がどのように変化するかを捉えることと②本動詞の格結合頻度との比較に基づき、「テイク/テクル」形と二格、カラ格との結合頻度がどのように変化するか、そしてその違いが生じる要因について考察することとの2点を目的とする。

### 2. 先行研究

ここでは主に格結合頻度の観点から「V テイク」と「V テクル」を対象とした研究として宮島達夫(1986)と李善姫(2009)を概観する。

まず、宮島(1986)は、格支配の量的側面から移動動詞と場所名詞句との結合頻度について調査を行った。調査の結果によると、対象の動詞を大きく〈到着点志向型〉〈出発点志向型〉〈経過点志向型〉の3種類に分けている。宮島(1986)は格結合頻度から移動動詞の分類を行ったものであり、「V テイク/テクル」形に考察の主眼を置いていない。従って、宮島(1986)は、本動詞に比べて「V テイク/テクル」形が異なった性質をもっていること、また、「テイク」より「テクル」の方に、やや出発点のカラ格が多いのは、「クル」の中心地志向性によるという指摘に留まる。

李(2009)は宮島(1986)が提示した結合頻度調査を参考にしながら、移動動詞と場所名詞句との結合頻度から移動動詞の範疇的意味を明らかにした上で動詞の分類を行った。李(2009)によると、移動動詞の範疇的意味の違いは「移動動詞のテ形+イク/クル」にも表れるとされ、コーパスから「移動動詞のテ形+イク/クル」の結合頻度を調査し、その考察結果は、①移動様態経路動詞のテ形+イク/クルは前項動詞が「イク/クル」の移動様態を表す。②「出発の位置変化・到着の位置変化・経路動作、経路動作を表す動詞のテ形+イク/クル」の形は前項動詞で表される移動の視点の違いを表す。といった二点にまとめられる。李(2009)が「V テイク/クル」についての結合頻度調査は、移動様態経路動詞及び出発の位置変化動詞はイクと結びつきやすいが、到着の位置変化動詞はクルと結びつきやすいという指摘に留まる。同じ着点志向型として、「イク」「クル」は異なるタイプの前項動詞を選ぶ理由について言及されていない。

先行研究を概観すると、本動詞が起点志向型、着点志向型、経路志向型の動詞に着点志向型とされる「イク」「クル」を付けると、本動詞の格結合にどのような影響を与えるか、本動詞の格結合頻

度とテイク/テクル形の格結合頻度にどのような違いがあるか、それに「テイク/テクル」形が本動詞に働く振り舞いは何であるか、先行研究がこれらの問題点については未だ十分に考察されていないと言える。

以上の問題点を踏まえ、本発表は拙稿 (2021a,b) をもとに起点のカラ格を考慮に入れると、二格、へ格の結合頻度に基づいた4分類はどのように変化するかを明らかにし、さらに本動詞と二格、カラ格との結合頻度の分析を行うと共に、「V テイク/テクル」形と二格、カラ格との結合頻度を調査し、比較を行う。これを通じて、「V テイク/テクル」形の格結合変化に関わる要因について考察してゆく。

### 3. 考察対象と調査結果

趙 (2021a) では考察対象を選定するに際して、『分類語彙表』を参考にした。その中の用の類に注目し、対象の移動と関わる項目から移動を表す他動詞に属する和語の単純動詞を選び出し、『日本語基本動詞用法辞典』を参考にしながら考察対象を27語に絞った。さらに、本動詞の格結合頻度を調査する際に、『現代日本語書き言葉均衡コーパス・中納言』を用いた。次の基準に従い、得られた結果から用例採取を行った。

- (1) 各動詞の表記上の差異は問わず、同一の動詞とみなす。
- (2) 「足を運ぶ」「腰を下ろす」のようなコロケーションは移動を表すというよりむしろ慣用句であると一般的に認識されると考えられるため、対象外とする。
- (3) 一つの動詞に格が二つ以上出てきた場合はその他として扱う。
- (4) 「キッチンから運んできた料理」のように、連体修飾的なものも考察対象として扱い、主節と従属節の区別はしない。
- (5) 「～はじめる」「～つづける」など局面動詞が付いたものは除外される。

趙 (2021b) は、移動を表す「V テイク/テクル」のついたものについて趙 (2021a) と同様の手法で調査を行った<sup>1</sup>。表1は、趙 (2021b) の調査結果から「V テイク/テクル」形と二格、カラ格の結合頻度とを対照させたものである。

表1 本動詞とテイク/テクル形の格結合頻度の比較表<sup>2</sup>

	本動詞		テイク形		テクル形			本動詞		テイク形		テクル形	
	ニ	カラ	ニ	カラ	ニ	カラ		ニ	カラ	ニ	カラ	ニ	カラ
上げる	22.7	13.6	7.1↓	7.1↓	11.1↓	33.3↑	進める	21.7	1.5	12.5↓	0↓	12.5↓	0↓
集める	7.8	5.8	0↓	11.5↑	4.6↓	21.6↑	出す	50.7	23.6	0↓	28.6↑	3↓	38↑
入れる	52.4	9.7	69.7↑	3↓	0↓	78.8↑	積む	40.5	0.4	43.8↑	0↓	39.3↓	0↓
浮かべる	52	0.5	50↓	0↓	0↓	0↓	吊るす	44.7	11.4	60↑	0↓	—	—
動かす	5.1	1.1	16.7↑	0↓	0↓	0↓	通す	9.6	0.1	13.5↑	5.9↑	0↓	0↓

<sup>1</sup> 「テイク/テクル」の格結合頻度を調査する際に、『筑波ウェブコーパス』を用い、趙 (2021a) が提示した基準に従い、用例採取を行った。「テイク/テクル」に「テイル」が後続する用例は極まれなので、格の結合頻度に影響を与えないと判断し、対象外とする。

<sup>2</sup> 表1における数値は、(一つの場所格のみが現れる当該動詞句の数/移動を表す当該動詞句の総数) から出たパーセンテージを表す。「↑」と「↓」を用いて格結合比率の上昇、下降を示しており、「—」を用いてコーパスから「吊るしてくる」「離してくる」という形式を検索できないことを表している。また、格結合頻度が上がる場合は灰色で強調している。

移す	60.7	2.2	53.9↓	0↓	44.7↓	7.7↑	届ける	25.3	2.5	26.5↑	8.8↑	34.9↑	0.9↓
奪う	0	21.7	0	25↑	0	35.3↑	飛ばす	6.7	2.9	0↓	0↓	0↓	35↑
置く	50.3	0	30.1↓	0	50↓	0	流す	12.2	3.9	23.5↑	0↓	0↓	15.4↑
送る	23.7	4.1	17.5↓	0↓	6.8↓	9.2↑	並べる	26.1	0.8	39↑	2.4↑	0↓	11.1↑
落とす	13.1	3	18.3↑	0↓	7.8↓	10.9↑	抜く	0	8.7	0	0	0	35↑
おろす	12.7	9.8	14.3↑	28.6↑	20↑	30↑	運ぶ	44.1	10.1	28.9↓	3.3↓	9.9↓	13↑
配る	34.2	1	34.8↑	12.4↑	26.9↓	0↓	外す	0	12.4	0	3↓	0	24↑
転がす	3	2.2	20↑	2.5↑	10↑	20↑	離す	0	24.8	3.6↑	30.1↑	—	—
下げる	23.2	9.5	8.7↓	4.3↓	13.6↓	0↓							

表1を見ると、以下の二点が注目される。

- (5) 本動詞が取る二格、カラ格の割合に比べ、「テイク/テクル」が付いた場合は大きく変動しているが、これについて、先行研究では十分に説明されていないこと
- (6) 本動詞は「テイク/テクル」によって、より二格と結びつきやすいものと、よりカラ格と結びつきやすいものとに分かるが、なぜこのような違いが生じたかについても、先行研究では十分に説明されていないこと

#### 4. フ格移動動詞と二格、カラ格との結合頻度

まず、フ格移動動詞が取る二格とカラ格の結合頻度を併せて図1に示した。ここでは動詞と二格との結合頻度を縦軸とし、カラ格との結合頻度を横軸として図示している。

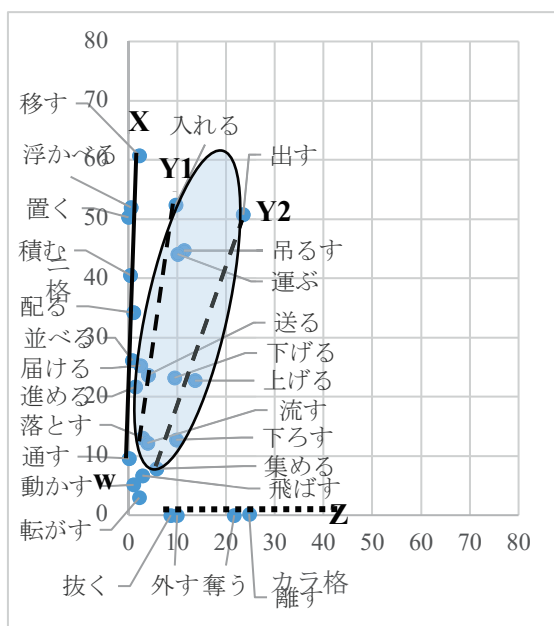


図1 二格、カラ格の結合頻度

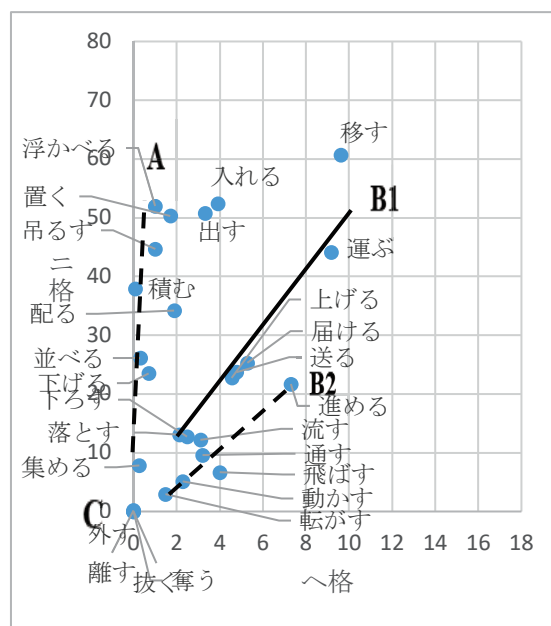


図2 二格、へ格の結合頻度

図1を見ると、本発表で扱う動詞は大きく3つのグループに分けることができる。まず、縦軸に沿って出現するグループがある。これは、二格と共起し、カラ格と共起しにくい動詞群である。これをXグループとしておく。一方、横軸に沿う動詞のグループがある。これは、二格と共起せず、カラ格と共起する動詞群である。これをZグループとする。XグループとZグループの間に、二格

ともカラ格とも共起する動詞群が分布している。これを Y グループとする。<sup>3</sup>最後に、Y グループの左下方向にニ格・カラ格のいずれとも結びつきにくい動詞群がある。これを W グループとしておく。

趙 (2021a) では、ニ格とへ格の出方によってヲ格移動動詞を 4 つに分けることが論じられた。これはニ格とへ格が同じ着点を表しながらも、〈継続性〉の有無に基づいて行われた分類である。図 1 に示すように、起点のカラ格と着点のニ格を一緒に考えると、いくつかの動詞の移行が見受けられる。これは動詞が持っている他の素性が関わっている可能性があると考えられる。したがって、ここでは対象移動動詞とニ格、へ格の出方による散布図をあげ、図 1 との比較を通して、ニ格とカラ格の出方に見られる動詞の移行に関わる要因を明らかにしたい。

図 1 と図 2 を併せて見ると、図 2 における A グループ<sup>4</sup>の動詞は図 1 における X グループとほぼ重なっているが、「入れる」「出す」「集める」は Y グループの方に引っ張られており、よりカラ格と結びつきやすい傾向が示されている。一方、図 2 の B1 グループに属する「移す」は図 1 の X グループに移行しており、カラ格と共起しにくいニ格と共起しやすい傾向が見られる。X グループと A グループのほとんどの動詞は重なっており、これらが起点のカラ格と共起しない、あるいは共起しにくいことから、着点専用動詞と見なして良いだろう。また、図 2 において起点志向型とされる C グループは図 1 の Z グループと完全に一致していることが分かる。これらの動詞はカラ格しか共起しないため、起点専用動詞と見なすことができる。

これに対して、Y グループには図 1 の A グループの一部と、「移す」を除いた B1 グループが混在しているようである。Y グループに属する動詞は着点・起点のいずれとも共起できるため、着点起点共用動詞であると考えられる。ただし、「入れる」「出す」「集める」のように、〈一継続〉でも着点起点共用動詞になるものもあれば、「移す」のように、〈+継続〉でも着点起点共用動詞になるものもある。つまり、同じ動詞がニ格とカラ格をとることができ、着点志向と起点志向は相反しない。継続性と起点・着点とは互いに別個の素性である可能はあるが、A と X、B と Y が一致する傾向は見逃せない。

さらに、図 2 において経路志向型とされる B2 グループの動詞は図 1 において Y グループの左下方向に W グループとして集まっていることが分かる。Y グループより下に位置するのは、ニ格と共起しにくいことを表すが、Y グループより左に位置する、あるいは縦軸に寄っていくことはカラ格と共起しにくいことを意味している。W グループの動詞群は Y グループと比べてみると、ニ格・カラ格のいずれとも共起できるが、共起の度合いは Y グループほど強いとは言えない。ただし、図 2 から分かるように、〈継続性〉においては Y グループより強い傾向が見て取れる。

最後に、Y グループに注目すると、ニ格とカラ格が 5 : 1 (Y1)、2 : 1 (Y2) の割合で共起していることが見て取れる。X、Y1、Y2 の三本の線から、対象移動動詞がニ格とカラ格を取る割合の段階性が見られる。ここで、ニ格とカラ格を取る割合の段階性は「V テイク/テクル」の格結合頻度の変化に意義があると考え、Y グループをさらに二分することにする。

以上のことをまとめると、図 1 における X、Y、Z、W グループと図 2 における A、B1、B2、C グループに見られる対応関係と、動詞別に持っている素性が以下ようになる。

表 2 を見て、おおよそ着点専用 (あるいは宮島のいう純粋到着型)、及び起点専用 (あるいは純

<sup>3</sup> 経路志向動詞には、ニ格・カラ格のいずれとも共起しないものがある。自動詞では、これらは原点に出現するが、他動詞を対象とする図 1 では、二重ヲ格制約のため出現していない。

<sup>4</sup> 「吊るす」と「下げる」は特殊な動詞であり、ニ格とカラ格両方を取ることができる上に、ニ格とカラ格が交替しても意味の変化を伴わない動詞である。従来の研究によると、「～に吊るす/下げる」と「～から吊るす/下げる」はそれぞれ着点と起点に注目しているが、「吊るす」と「下げる」の場合となると、起点と着点が重なってニ格とカラ格を交替しても文としての意味は変わらない。以上のことから、「吊るす」「下げる」を考察対象から外すことにする。

表2 動詞別と限界性、継続性、結果性、着点性、起点性との関係

X=A	着点専用	+限界性、-継続性、+結果性、+着点性、+起点性
Z=C	起点専用	+限界性、-継続性、+結果性、-着点性、+起点性
Y=B1	起点着点共用	+限界性、+継続性、+結果性、+着点性、+起点性
W=B2	経路指向	-限界性、+継続性、-結果性、+着点性、+起点性

粹出発型<sup>5)</sup>のものは〈-継続性〉であり、着点も起点も取るものは〈+継続性〉であるという傾向がある。以上見てきたように、「起点志向型」と「着点志向型」をさらに「起点専用」「着点専用」「着点起点共用」と下位分類することが出来る。また、宮島(1986)と比べると、本論文は宮島(1986)の分類の仕方を踏襲するものであるが、個別の動詞分類について宮島(1986)と異なった傾向を示している。例えば、宮島(1986)で「純粹到着型」とされる「いれる」「あげる」は、本論文の分類の仕方によっていずれも「起点着点共用」(宮島のいう「到着出発型」)に属することが分かる。

## 5. ヲ格移動動詞のテイク/テクル形とニ格、カラ格との結合頻度について

以下では、ヲ格移動動詞の「テイク/テクル」形とニ格、カラ格との結合頻度をそれぞれ散布図で示すと、図3と図4になる。

図3では、原点から引いてある点線はヲ格移動動詞の「テイク」形が1:1の比率でニ格とカラ格と共起することを示している。この点線によってすべての動詞を三つに分けることが出来る。点線から左上方向に行けば行くほどニ格を取る割合が高くなるが、一方、点線から右下方向に行けば行くほどカラ格と結びつきやすい傾向が示されている。それに、原点に集まっている動詞もあり、これらはニ格とカラ格のいずれとも共起しない。

また、図1と図3を併せて見ると、図3において横軸に引っ張られた動詞は図1においてY2とZグループの動詞に当たることが分かる。これに対して、図1のXとY1グループの動詞は図3においては縦軸に引き寄せられたことが読み取れる。すなわち、本動詞がカラ格と結びつきやすい動詞はテイクによってカラ格との共起が一層強化された。一方、本動詞がニ格と共起しやすいものはテイクによってニ格との共起が助長された。

以上の分析から、ヲ格移動動詞に「テイク」を付けることによって、直線の左上に集まっている動詞グループはニ格と結びつきやすくなるが、直線の右下に横軸に偏っている動詞はカラ格と結びつきやすくなることが言える。例えば、もともと図1においては直線上に並んでいる「下ろす」「出す」はニ格とカラ格とが2:1の割合で両方取れるが、一方、図3においては「下ろす」「出す」はカラ格とニ格とがそれぞれ2:1、4:1の割合で両方取れる。また、「移す」「運ぶ」以外に元々ニ格と高い頻度で結びつく動詞でも、「テイク」を付けることによってニ格との結合頻度がもっと高くなる傾向は図3から読み取れる。以上のことから、「テイク」形にはもともとニ格に重きを置いてる動詞(着点注目動詞)をよりニ格の方に導く機能と、ニ格よりカラ格を導きやすい機能を動詞と格に与える可能性がある。

図4において、原点から引いてある点線はヲ格移動動詞の「テクル」形が1:1の比率でニ格とカラ格を取ることを示している。図3と同様に、点線によってすべての動詞を三つに分けることが出来る。点線から左上方向に引き寄せられた動詞グループはほぼニ格しか取らないが、点線から右下方向に行けば行くほどカラ格と結びつきやすい傾向が示されている。最後に、原点にある動詞は「テ

<sup>5)</sup> 宮島(1986)の考察対象の中には「純粹出発型」に該当する動詞がないが、氏の分類の仕方によって、このタイプの動詞を「純粹出発型」と名づけることができる。

クル」によってニ格とカラ格のいずれとも共起しない。

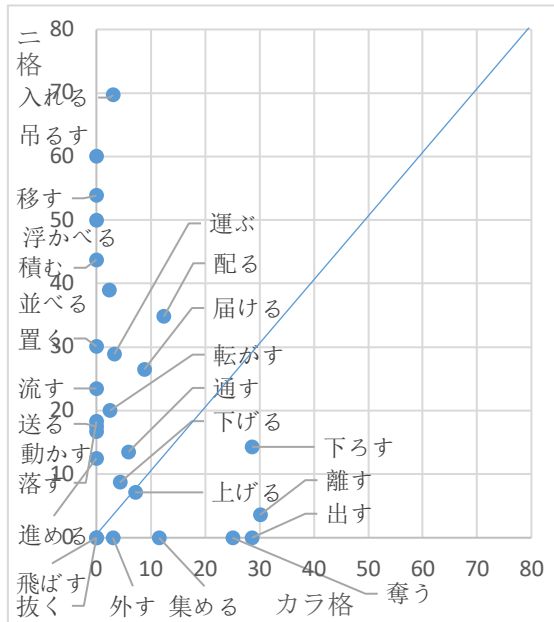


図3 テイク形とニ、カラとの結合頻度

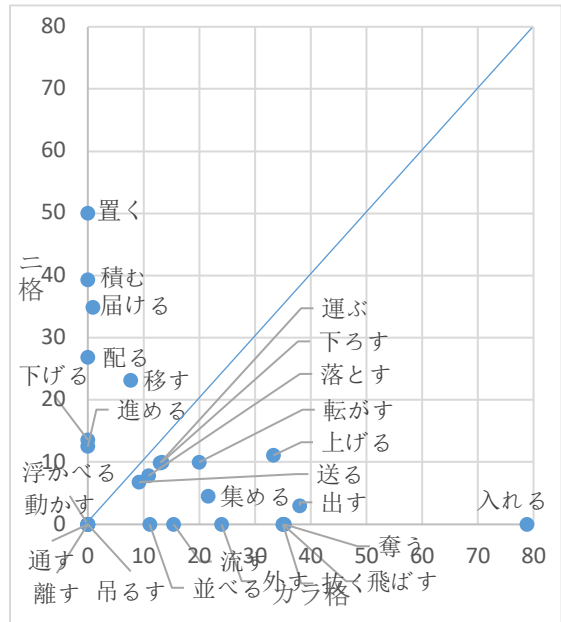


図4 テクル形とニ、カラとの結合頻度

さらに、図4と表1を併せて見ると、本動詞とカラ格の結合頻度より「テクル」形とカラ格の結合頻度が大幅に増え、カラ格と最も高い頻度で共起する動詞も全体の15%から56%に上がった。また、「テクル」によって完全にカラ格と共起しない動詞が見られる。これらの動詞は元々本動詞がカラ格と共起しにくい傾向を示している<sup>6</sup>。つまり、「テクル」が後続した場合、「クル」に由来する〈求心性〉が格結合の変化に関与していると言える。

## 6. おわりに

本発表では第1節で述べた2つの目的に照らして以下の5点を指摘した。

まず、起点という要素を考慮に入れると、①「起点志向型」と「着点志向型」をさらに「起点専用」「着点専用」「着点起点共用」と下位分類することが出来ること、②そこからヲ格移動動詞の分類に関わる起点性という素性が導き出されることを明らかにした。次にヲ格移動動詞に「テイク/テクル」をつけると、動詞によって③ニ格の方に引っ張られる、カラ格の方に引っ張られる、原点に集まるといった3つの傾向が見受けられること、④「テイク」が後続した場合、〈+着点性〉の動詞はニ格が助長されるが、〈+起点性〉はカラ格の助長に大きく関与していること、⑤「テクル」が後続した場合、「クル」に由来する〈求心性〉が関わっていることを指摘した。

今後は「テイク/テクル」形とヘ格・カラ格、マデ格・カラ格との結合頻度を調査する必要がある。

【参考文献】 ●李善姫 (2009) 『日本語移動動詞の研究』東京外国語大学博士学位論文。／●趙金昌 (2021a) 「格支配の量的分析に基づく対象移動動詞の分類と考察」『日本語と日本文学』第67号、筑波大学日本語日文学会。(印刷中)／●趙金昌 (2021b) 「ヲ格移動動詞のテイク/テクル形とニ格、ヘ格、マデ格との結合頻度について—本動詞の格結合頻度との比較を通して—」『日本語学研究』第69輯、pp137-155、韓国日本語学会。／●宮島達夫 (1986) 「格支配の量的側面」『論集日本語研究現代編』(宮島 (1994) : 437-461 (に所収)。／●宮島達夫 (1994) 『語彙論研究』むぎ書房。資料 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス・中納言』<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

<sup>6</sup> 本動詞としてカラ格と高い頻度で共起しているが、テクルが付くとカラ格と共起しない「吊るす」「下げる」はカラ格とニ格が交替することができ、交替しても意味は変わらない点から、他の動詞と区別されるべきである。